

あとがき

人生、出会うべき人には必ず出会う しかし 内に求める心なくば・・

専修大学スポーツ研究所長

佐藤 雅幸

人生、出会うべき人には必ず出会う。しかも、一瞬遅からず、早からず。しかし、内に求める心なくば、眼前にその人ありといえども縁は生じず。この言葉は教育学者・哲学者の森信三先生の言葉である。

縁とは本当に不思議なものである。この世に生をうけて、自分が今ここに至るまで、いったいどのくらいの人と出会ったのだろうか？

私には師匠がいる。日本体育大学名誉教授の長田一臣先生である。我が国におけるスポーツ心理学者、スポーツメンタルトレーニングの第一人者。トップアスリートに対して、「体力」と「技術」に一切タッチすることなく、専ら精神的な側面を訓練することで、競技成績は向上するか否かの検証を行った。当時、役に立たない学問と揶揄されていた体育心理学（スポーツ心理学）を役立つ学問にすべく、催眠法や自律訓練法といった技法を用いて選手の心と体の奥底に潜む不安・恐れ・迷いなどを乗り越えるための研究に没頭された。

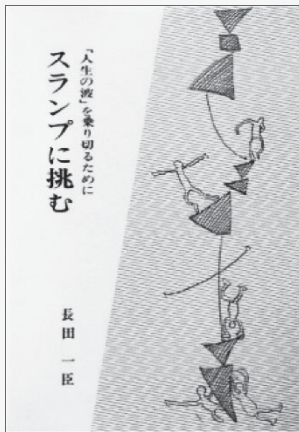
弟子入りしたその日、長田先生は私の眼を

じっと見ながら「僕は、学問というものは実践に役立つべきものであって、実践の提起する問題にこたえて、実践によって検証されるものでなければならぬと思うが、君はどう考えるかね？」と尋ねられた。私は、「机上の空論ではない、実践に役立つ研究をするためにここに来ました！」と答えた事を昨日の事のように思い出す。長田先生55歳、私24歳の時であった。

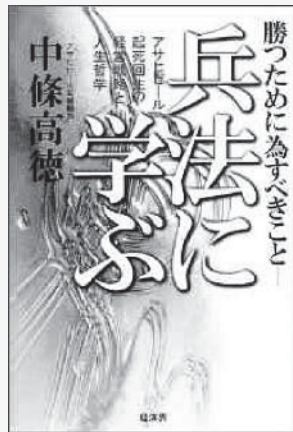
もう一人の師匠は、アサヒビール名誉顧問の中條高德先生である。「アサヒスーパードライ」作戦の陣頭指揮をしたアサヒビール復活の立役者である。中條先生と出会ったのは、今から29年前になる。専修大学女子テニス部監督として是が非でも日本一になると決意して活動しており、度々、無理な御相談をしていた。怖いもの知らずの上、世間知らずで無礼な者の私を大きな心で受け止めて頂いた。園田学園女子大学の連覇を阻止して大学日本一になった時、中條先生は私の眼をじっと見ながら「佐藤君、良く聞け！絶対に地位で人を率

いるなよ！あの人のためなら何でもすると思わせるような人間力を磨きなさい。それから、苦難や困難は神様が与えてくれる試練だから、そういうときでも"ピンチをチャンスと置き換えることができる明るい資質"がないといけないよ。それ無きものはリーダーの座を去らなければならない。志無きは舵なき船、轡なき馬のごとし・・」と教えられた。中條先生の言葉は、楔(くさび)のように今でも心に突き刺さっている。中條先生60歳の時である。両師匠には、もうお会いする事は出来ないが、弟子にして頂いた事に心から感謝して精進していくつもりである。

2010年から専修大学スポーツ研究所所長を務めさせていただいて今年で6年になった。振り返れば、サッカーワールドカップ南アフリカ大会から始まり、3.11東日本大震災、ロンドンオリンピック開催、ソチ冬季五輪、国立競技場問題そしてラグビーワールドカップで南アフリカチームから歴史的勝利など・・様々な事を思い出す。事務能力、リーダーシップ能力〇



「スランプに挑む」長田一臣著



「兵法に学ぶ」中條高德著



「心変われば」



「星陵高校サッカー部優勝への軌跡」

の私がなんとかやってくれたのは、佐藤満事務局長ほかスポーツ研究所スタッフの献身的なサポートがあったから他ならない。感謝申し上げたい。

2015年の専修大学スポーツ公開シンポジウムのテーマは、「OLYMPIC PARALYMPIC 一体のレガシー」であり、今年も素晴らしいパネリストをお招きすることができた。東京2020オリンピック・パラリンピックを見据えて、高橋明氏（大阪体育大学客員教授）、河合純一氏（日本パラリンピアンズ協会会長）、李宇諤研究所所員（法学部准教授）を迎え、基調講演、シンポジウムを開催させて頂いた。また、研修会では、北陸新幹線で星陵高校へ伺い、松井秀喜氏の育ての親、野球部名誉監督・山下智茂先生、同監督・林和成先生、本田圭祐選手の育ての親、サッカー部監督・河崎護

先生、金沢星陵大学野球部監督・北川良先生にご参加いただき、「ジュニア選手を育てる育成環境～高校指導者の視座から～」を実施することができた。研修会を通して、星陵高校の指導者には、指導哲学（山下イズム）が流れていることを知った。私は、山下イズムの源を知りたくて質問した。「山下先生の師匠は誰ですか?」と。すると、お母さんの話をされた。「子供のために、朝の3時から仕入れた魚を籠に入れ、天秤棒を通して肩に担いで売りに行くお母さんの後ろ姿・・・」納得した。真理を探究する信念と厳しさ、知性そして愛情の源は、強く優しいお母さんから受け継がれたものだと確信した。

私事、今年還暦を迎え、振り返ればたくさんの素晴らしい人と奇跡のような出会いがあり、チャンスを与えられてきた。本当に幸運な

男だと思っている。今後は、自分が先人からして頂いたように、まだ土の中に埋もれている気概のある若者を探し出し、チャンスを与えられるようになるために、研鑽を積んでいくつもりである。

今年は十二支の9番目の年、「申年」である。「申」とは、草木が十分に伸びきった状態で実が成熟して香りと味が備わる時期を意味する。2016年の専修大学スポーツ研究所は、申年にあやかり、更に加速して独創的で意義ある活動をしていくに違いない。

最後に、今年も「2015年度スポーツ研究所所報」を無事、発行する事ができました。日頃、スポーツ研究所の活動に御協力いただいている皆様の御厚情に対して、心より御礼申し上げます。

SENSHU UNIVERSITY INSTITUTE OF SPORT

専修大学スポーツ研究所

佐藤 雅幸	野呂 進	吉田 清司
佐竹 弘靖	佐藤 満	飯田 義明
久木留 毅	齋藤 実	平田 大輔
時任真一郎	渡辺 英次	富川 理充
相澤 勝治	李 宇諤	

専修大学スポーツ研究所報 2015

平成28年3月31日
 発行者 佐藤 雅幸
 発行所 専修大学スポーツ研究所
 〒214-8580
 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
 電話・ファクシミリ 044-911-1032
 E-Mail sports@isc.senshu-u.ac.jp
 デザイン 山岸淳デザイン(株)